

ディケンズの中期「短編小説」

村田 信行

ディケンズの中期「短編小説」

村田信行

Dickens' Short Stories in His Middle Period

Nubuyuki Murata

初期・中期・後期に分けられるディケンズの短編小説(short stories)について、中期をまとめる。彼の作風は1840年代の5つの主要クリスマス作品をはさんで大きく変化する。ディケンズは、世知辛く夢のない時代にはリフレッシュできるような読者に想像力を喚起するおとぎ話を供給すべきと考え、チャップブックに学んだ storybook の効用をクリスマス作品の中に活かす一方、社会や為政者を中心に社会批判的様相を強めた。

キーワード：ディケンズ 中期 短編小説 おとぎ話 クリスマス

この論文は、「ディケンズの初期短編小説(2)」を引き継ぎ、初期・中期・後期の3つに分けられるディケンズの「短編小説」(short stories)について、中期をまとめるものである^①。「短編小説」をめぐる時期区分を改めて挙げる。

- I 初期(1833-40)： 雑誌『ハンフリー親方の時計』^②で本格的に分冊形式の長編に手を染めるまで、精力的に数多くの stories を書いた。
- II 中期(1840年代)： ディケンズ本人が大衆は short stories を望んでいないと考えて、クリスマスの作品以外ほとんど書かなかった。
- III 後期(1850-68)： 自前の2つの雑誌を中心に、再びかなりの数をこなした。

熱心な読者ならだれでも気づくように、ディケンズの作風はクリスマス作品と呼ばれる5つの中編をはさんで^③、長編で言えば『マーティン・チャズルウィット』(1844)から『ドンビー父子』(1848)にかけて大きく変化した。この変化は、彼の小説そのものばかりでなく、short story への考え方にもはっきり表れている。『ハンフリー親方の時計』の巻頭言(1840)にも明らかのように、それ以前は彼の書く short story を読者は自然に受け入れ熱狂してくれたが、『ハンフリー』の失敗の後、ディケンズは前ほど衝動的に思うまま書くのではなく、世の中が世知辛く夢のない時代になればなるほど、たまにリフレッシュして想像的な休暇を取れるように読者にお話を供給することこそ肝心だと考え

るようになった。このことは彼が編集長をつとめた週刊誌『家庭の言葉』のねらい(1850)と比べてみればよくわかる。現実逃避的であった『ハンフリー』の巻頭言には、永遠に現実世界から逃げてひそかに「架空の世界」(world of make-believe)に入り浸るのが目的だとある⁴⁾。『家庭の言葉』のまえがきでは、この現実世界の中に空想(fancy)の世界を存在させることが目的だとする。

どんな功利主義的精神があっても、厳しい現実によってどんなに心が締め付けられても、私たちの作る『家庭の言葉』は厳しい雰囲気の影響されない。若いも若きも、金持ちも貧乏人も、すべての人々の心の奥底に本来人間には備わっているその空想のともしびを掲げるのである。そのおかげで、活力の炎が生まれ、陰鬱な気分を沈め、仮に悲しいことが起こったとしてもその炎は決して消えてしまうことはない⁵⁾。

この2つの宣言の間の10年にも及ぶ期間に、ディケンズはshort storyを書くことに以前ほど執着しなくなった。ただ価値を見出していたのは、スクルージやデイビッド・カパーフィールドが『アラビア夜話』(Arabian Nights)を読んだことを子ども時代の有益な体験であったと考えたり⁶⁾、『ドンビー父子』のポールが老水夫クラブ(Old Glubb)の話してくれる海や魚の話や、海の怪物の不思議な話などをブライマー先生のきついラテン語文法の勉強の中休みとして聞きたがる(p.152)といったことであった。

ほとんどshort storyを書かないでいたこの期間の例外はクリスマス作品である。それらの作品にはしっかりディケンズの幼少期の読書の記憶がすりこまれている。これにまつわる伝記作家フォースターの言葉は有名である。

ディケンズほど強烈におとぎ話(nursery tales)の好きな人間はいないし、そういう話にもっと立派な様式を授けるために自分はこの世にいるのだとひそかに喜んでいたと思う。伝えようとした社会的価値や人間としての価値というのは、彼にしてみれば、初期作品での描き方は荒くて不十分だとしても、幽霊や悪鬼の魅力のことであり、子どものころに読んだ空想物語のことだったのである⁷⁾。

すでに多くの批評家が指摘しているように、彼の5つのクリスマス作品は、小説家としての業績の中でも重要な部分を占めている。これ以後の作品につながる手法やテーマの実験をそれらの作品の中で展開したからである。と同時に、膨大な長編群に比べれば小ぶりなこれらの作品を境に、ディケンズはshort storyへの考え方を変化させてもいる。この世知辛い現実(workaday world)の中で、ディケンズはstorybookなるものへの関心を高めていく。

ディケンズのダイナミックな表現力の中で、彼の使う言葉や単語を的確に定義するの

は想像する以上に難しい。文章を書く中で特別に感情的な意味を持たせようとしたときも、多くの言葉や単語の意味はしばしば揺らいで不正確である。しかし **storybook** については、実際のところ、本の体裁をしたおとぎ話(**nursery tales**)と同義のように思われる。オックスフォード英語辞典によれば、**storybook** は一般的に 18 世紀から 19 世紀には青少年向けの本だという含みがあり、ときに小説や恋物語を指すこともあるが、普通は物語、特に子ども向けの物語からなる本と考えられる。もっと重要なことは、ディケンズの場合は小さいころに耽読したチャップブック(**chapbook**)と呼ばれるさまざまなお話の集まった読み物の影響が大きいということだ。チャップブックとは、行商人(**chapman**)によって街頭で売られた薄表紙の、日本で言えば江戸時代のかわら版や黄表紙本のようなもので、宗教、超自然的なもの、妖精物語や寓話、迷信や伝説、昔話や中世ロマンス、歴史、犯罪者や事件レポートなどから、果ては占い、生活上のハウツーもの、旅行ガイド、レシピまで幅広く、ほとんど何でもありの内容であった。粗末ながら木版の挿絵なども加わり大変読みやすく、多くの人々にとって貴重な情報源で、教育効果の高いメディアでもあった。本来子ども向けではなかったが、大衆の娯楽のために平易に書かれているので、内容によっては子どもにも十分楽しめた^⑧。

チャップブックは 16 か 24 ページ程度で、大きさは文庫本くらいの非常に廉価なパンフレットとも呼べる手軽な本であった。17～19 世紀にイギリスで流行した形式だが、ディケンズも特に、昔話、おとぎ話、伝説などを通して大いに影響を受けたものらしい^⑨。巨人殺しのジャック、青ひげ、美女と野獣、ヴァレンタインとオーソン、ワット・タイラー、親指トム、シンデレラ、リチャード・ウィッティントン、修道士ペーコン、さすらいのユダヤ人、などなど^⑩、ヨーロッパ諸国のありとあらゆる伝説や物語にあふれていた。ロビンソン・クルーソー、ジル・ブラース、ドン・キホーテ、ガリヴァー旅行記などの有名な劇や小説が簡約され、ダイジェスト版としてチャップブックに登場することもあった。ディケンズが長じてオリジナル作品を読む前に、17～18 世紀の人気物語にいち早くなじんだことも十分推測される。

このように、ディケンズが **storybook** と呼ぶときには彼本来の分冊形式の本などとは大いに異なるものを想定し、個別に出版された子ども向けの **short story**、あるいは何編かまとめた選集を想定していたと考えられる。すなわち、子どものころにお世話になったチャップブックの体裁そのものであった。

この時期以降もディケンズは生涯を通して、自由に想像力をはばたかせる読み物を奨励続けた。たとえば、1850 年には慈善家で社会運動家のアンジェラ・バーデット＝クーツ^⑪にあてた手紙の中で、「もっと多くの人々が、あなたのように、教育というものにしっかり関心を持ち、想像力の効用(**imaginative faculty**)について考えるようになるとしたら、素晴らしいことなのですが」と述べ、続いて、彼女の意に沿った子ども向けの本を出版してくれそうな会社をいくつか挙げた後に、1842 年のアメリカ訪問の船旅で楽しく読んだ具体的な本の名前まで挙げている^⑫。ここで同時に記憶してよいことは、

1842 年の前半の数か月にわたったアメリカ訪問は妻キャサリンと数名の随行者のみで、子どもはイングランドに残っていたことである。ディケンズのアメリカやアメリカ国民に対する印象は必ずしも良好なものではなかったようだが、訪れた当時ディケンズは若干 29 歳ながら、すでに『ピックウィック』『オリヴァー・トゥイスト』『骨董屋』などの人気作者としてこの世のものとも思えないほどの歓待を受け、さらに翌年の 1843 年末に出した「クリスマス・キャロル」の爆発的な成功により、クリスマスという季節が彼のねらっていた空想の世界に浸る格好の場所になったと言えるだろう。ディケンズは生涯クリスマス作品を書いていたと言説⁽¹³⁾が出てくるほど彼はクリスマスに特別の感情を抱いていたが、その権利を得たのがこのときであった。

ハウス氏は早くも 1940 年に、ディケンズのこの特徴をとらえて、クリスマスは日常のルールを捨て去ることが許される特別の季節であると説明する。

クリスマスとは日頃の社会生活によって押し付けられた束縛や抑制を一時的に壊していいことを意味していて、古代ローマの農神祭(Saturnalia)のようなお祭り騒ぎをして、一種の心理的解放を得るものだ。いろいろな愛情や感情を鈍らせる数々の心配事から解放されることであり、(中略) 仕事上の関係などに見られる形式ばったことや厳格さから離れてリラックスすることである⁽¹⁴⁾。

これは社会生活上の因習に限ったことではなく、人間同士の意思疎通をはばむ束縛や想像力のじゃまをするようなものにも当てはまる。『ピックウィック』の例を示せば、ワードル氏(Mr. Wardle)のディングリー・デル(Dingley Dell)の農場でのクリスマスでは、身分を越えたリクレーション、すなわちめくら鬼の遊びやヤドリギの下での争奪戦ばかりでなく(28 章)、「墓掘り男をさらった鬼たちの話」(The Story of the Goblins Who Stole a Sexton, 29 章)という想像力を駆使したお話もなくてはならない。同様に、クリスマスは他人へ心を開くだけではなく、過去の思い出を語り、未来のことを夢見、これまで実現しなかったことを心に描いてみるときである。

歓迎だ、何もかも！ 実現したことも、実現しなかったことも、そしてこれから実現しそうなこともみんな、ヒイラギの下の避難所に、クリスマスの暖炉のまわりの心地よい場所に、何もかも大歓迎だ、心を開いて待ち受けているから！⁽¹⁵⁾

これらの感情の解放および想像力の解放は、「仲間意識」(fellow feeling)という観点も強調しつつ繰り返される。先の拙論でも述べたように、『ハンフリー親方の時計』の実験に失敗した後、ディケンズは想像力の現実逃避は一時的であればこそ有効であると承知していた。悲しいかな、クリスマス休暇中だけの休息ではあるが、人々はひとしきり心をリフレッシュさせて、すぐに厳しい現実の生活へと戻って行く。

「クリスマス・キャロル」は、この一時的な現実逃避と仲間意識をわかりやすくテーマとして提示し、見事に大成功を収めた。このお話の主旨は、金銭的な利益のみに突き動かされて生きている功利主義的な高利貸しであるスクルージ(Scrooge)を教育し直すことである。彼は「ロンドンのどの人間よりも想像する力(fancy)を持ち合わせていない」(p.14)が、共同経営者であった故マーレー氏の幽霊に会い、骨の髄まで浸みる恐怖を味わってから、一夜のうちにクリスマスの幽霊が見せる不思議な過去、現在、未来のクリスマスの風景に、忘れていた無垢な人間的感情を思い出し、誰よりもクリスマスの精神を持ち合わせたまっとうな人間に生まれ変わる。過去の幽霊が見せるスクルージの子どものころの姿は驚くほど普通で、アリババや魔法のランプの精霊などが活躍するStorybookのお話を無心に読み、周辺の人々の気遣いに反応するけなげな姿が続く(p.28)。現在の幽霊が見せるクラチット家の様子は心温まるとともに、その貧しさゆえに病弱なティムがやがて死を迎えるのも時間の問題という状況に、まっとうな感情を取り戻しつつあるスクルージは「よき商人」(good businessman)よりは「よき仲間、隣人」(good fellow)になろうとする気持ちを思い出す。最後に未来の幽霊は、寒々とした無縁墓地で朽ち果てるように死を迎えたいスクルージの末路を突きつける。

この作品は過去、現在、未来とそして空間的にも多くの場面をテンポよく見せて、歯切れよく、印象的な風景を間断なくつなぐ。まるで空を飛んでいるかのような、あるいはタイムマシンを駆っているかのような手法が効果的だが、これは松村氏が指摘するように、18世紀フランスの小説家ル・サージュの『悪魔アスモデ』に発するものらしい⁽¹⁶⁾。19世紀前半のイギリスやアメリカでも、都市の人口がふえ都市生活への関心が高まるにつれ、多くの作家やジャーナリストたちがル・サージュさながらに屋根はがしの手法を取り入れ、人々の生活を描いて見せることがかなり流行したらしい。この手法は次作「鐘の精」でも使われることになる。

ストーン氏は、ディケンズがクリスマス作品をおとぎ話(fairy tales)として考えていたと言う⁽¹⁷⁾。ディケンズがテーマとして、特におとぎ話によって培われると考えていた想像力(fancy)というものにこだわったのは、十分計算づくであったように見える。『ピクウィック』の挿入作「墓掘り男をさらった鬼たちの話」で使った手法を「クリスマス・キャロル」でもうまく発展させ、当時彼が関心を持っていた強欲とか、貧しさにあえぐ子どもとか、雇い主と使用人の関係などを巧みに取り入れた。人間の持つ想像力と世知辛い世の中でのstorybookの効用が当時のディケンズの考え方の中心を占めていたと言える。

トーマス氏ならずとも「クリスマス・キャロル」はディケンズ最高のshort storyである⁽¹⁸⁾。その形式とテーマは渾然一体となり、クリスマスという慈愛の季節にしっくりはまっている。引き続き4作でも、この書き方は多少の精度の違いはあれ踏襲されることになる。

第2作「鐘の精」では、主人公の公認配達屋(ticket porter)トロットィ・ヴェック(Trotty

Veck)は、自らの貧しさを顧みず偶然行き会った男ファーン(Fern)とその姪リリアン(Lilian)に一夜の宿を提供する心優しき人物だが、教養も乏しく理解力に欠けて、市参事会員や国会議員たちが貧乏人を馬鹿にし人間扱いしない態度にも抗うことができない。失意の果てに、夢遊病のように鐘楼に上り詰め墜落死を遂げ幽霊となり(実は夢の中で)、スクルージュさながらに、娘メグ(Meg)と乳飲み子の身投げや、リリアンの身を持ち崩す転落の顛末を見る。すんでのところ、自分の考えのなさと罪深さを痛感し、メグに救いの手を伸ばし、新年を告げる鐘の音ともに夢から目覚める。

「クリスマス・キャロル」より劇的さや軽やかさに欠けるが、支配層に対する厳しい見方、貧困層に対するより慈愛に満ちたまなざしなど、社会批評的な態度が明らかである。飢餓の40年代(Hungry Forties)と呼ばれ、チャーティスト運動のさかんな時代背景の中、『ドンビー父子』(1848)や『辛い時代』(1854)につながる社会構造にも目を向けたディケンズの転換点となった作品と言える。売春、幼児殺し、自殺といった具体的に悲惨なイメージを見せながら、社会構造の間違いに焦点をあて、大衆の怒りを引き出すのに成功している。その鋭さゆえに、おとぎ話というよりは社会改良運動のためのパンフレットのようにさえある⁽¹⁹⁾。夢の目覚めは前作ほどさわやかではなくなっているが、読者の印象は深い。

第3作「炉辺のこおろぎ」では、社会批評性は薄らいでいる。始まりは、運送屋(carrier)ジョンとメアリー(おちびちゃん=Dot)の年の差はあるが仲のよい夫婦が明るく幸せな雰囲気を作りまくるが、あやしげな旅人の登場とともにジョンの誤解からメアリーの浮気疑惑が浮上する。おもちゃ職人(toymaker)プラマー(Plummer)の愛娘バーサの旧友メイがおもちゃ会社の経営者タックルトン(Tackleton)と政略的にやむを得ず結婚する筋書きと絡まって、やや笑劇的な安っぽさに墮している。スレイター氏は、この作品を読むとタックルトンやプラマーの商売ではないが、「おもちゃの世界にいるようである」と言う⁽²⁰⁾。「登場人物は、息を吹き込まれた人形(今風に言えば、アニメのキャラクター)のようで、名前さえ子どもじみている」と⁽²¹⁾。

ジョンの誤解は単なる思い込みと判明し、タックルトンの結婚も無事阻止されて、典型的なハッピーエンディングを迎えるが、ジョンとメアリーの夫婦には、明らかにディケンズ本人と妻キャサリンの次第にうまく行かなくなっていた仲が反映されている。あやしげな旅人と妻の関係を勝手に思い込んで、懊悩の一夜を過ごした翌朝、誤解が解けてジョンは我が身を振り返る。

俺は考えただろうか？ あの若さと美しさを備えた彼女を——若い仲間から引き抜き、彼女が中心にいて、光輝く星でもあったあまたの場面から連れ去って、来る日も来る日も退屈な俺の家に閉じ込め、さえない俺の相手をさせたってことを。

(p.217) ⁽²²⁾

ジョンはディケンズ、メアリーはキャサリンではなくて、その逆をディケンズ本人はイメージして書いているようで、妻に理解されず、不当に遇されている自分を慰める筋立てになっているという意見もある。

自分の境遇に引き寄せたこれらの重さと比べて、ジョンの誤解の氷解ぶりやその後のはじけすぎたクリスマスの騒ぎはかなり奇異な印象を与え、大団円のタックルトンの善人への変身ぶりにも無理があり、ディケンズの真骨頂であるおとぎ話の構図にも感心させるだけの上質が見当たらない。

第4作「人生の戦い」は、おとぎ話の構図や社会批評の観点が意図的に排除されていて、自己の内面を見つめるまなざしが際立っている。クリスマス作品の名声は一段と高まって売り上げも好調だったが、グレース(Grace)とマリオン(Marion)の姉妹が一人の男をめぐる譲り合うという人間ドラマは中途半端に終わって、人物造形も平板と言える。トーマス氏は「めそめそして感傷的で、ありそうもない筋立てだし、登場人物のふるまいも動機づけが弱く、うすっぺらである」と手厳しい⁽²³⁾。ストーン氏も「もっともクリスマス作品らしくないし、出来の方ももっとも悪い。」と述べ、「(20分冊形式の『ドンビー父子』の開始と重なって) 忙しすぎたせいもあるが、もっと基本的にはこの素材の扱いにくさのせいである。」として、ディケンズがおとぎ話の構図を捨てながら、かなりの分量が必要と思われる本格的な人間関係の造型に取り組んだのは失敗だとする⁽²⁴⁾。

最終作第5作の「憑かれた男」は、過去の辛い記憶を幽霊に売り渡すというおとぎ話らしい構図にふたたび戻る。しかし、彼の伝記的要素の影響が強いことも明らかで、自己の内面を見つめる通奏底音は続いている。ディケンズのことをサンタさながらのクリスマス物語おじさんだと仰ぎ見ていた同時代人でなく現代の読者なら、一読して主人公化学者レドロー(Redlaw)がディケンズその人である印象はぬぐえないであろう。若くして成功の夢に取りつかれ、希代の速記者として頭角を現し、マライア・ビードネルなど恋のとりこぶりは激しく、数多くの人気長編を書くかわら『家庭の言葉』や『一年中』のワンマン編集長として膨大な文章を書き続け、自作品の公開朗読会を各地で死ぬ間際までこなしたエネルギーあふれる人物。レドローの鬼気迫る容貌や雰囲気はディケンズそのものを髣髴させる。

つとに有名な少年時代の靴墨工場でのつらい体験が初めて表面に出てきたのは1847年3月である⁽²⁵⁾。後にディケンズの伝記を書く友人フォースターに届いた情報で、ディケンズが靴墨工場で働いていたのを見たという人がいるが本当かとの問い合わせがあった。悩んだ末に顛末をしたためてフォースターに渡したが、伝記は結局、生前には出版されず、靴墨工場ことは生涯家族には知らされなかった。ディケンズを尊敬しきっていた義妹メアリーの突然死は1837年だが、10年後のこのころ、肉親の中ではもっとも心の通じ合っていた姉のファニーが1848年9月に結核で世界。一連のこれらの出来事はディケンズが過去の記憶をうとましく思わせ、明から暗への作風の転換を後押ししたと言われる。

レドローが両親の愛情を十分に受けられなかったとか、心の支えだった妹を亡くすとか、ディケンズの実人生との符号は数多い。過去の記憶にさいなまれる人間の苦悩の姿を表すことは、翌年 1849 年から登場する自伝的長編『デイヴィッド・カパーフィールド』の露払いであったとも言えるのである。過去の記憶から解放されるためには、すべてを白日にさらすしかないのは、モーム(William Somerset Maugham)の『人間の絆』(Of Human Bondage, 1915)をはじめ、古今東西同じであろう。

スクルージがクリスマスの精霊の放つこうこうたる光で過去を否応なく見せつけられるのと、レドローが見たくない過去の記憶を魂と交換に失うのとは、過去をうとましく思う点で同じである。学寮の管理人の妻で天使のようなミリー・スウィジャー(Milly Swidger)のおかげで、レドローは自分の部屋にこもり死の世界へ落ちていくのを救済される。

苦しみや悲しみがなければ、私たちは身のまわりの善きことの半分もわからないのです。……あなたがいつか記憶を取り戻されて、そう祈っていますが、被った不幸とそれに対する許しを一緒に思い出すことはとても幸いなことではないですか。(p.393)

辛い記憶から逃げるのではなく立ち向かってこそ人間性を取り戻せる。スクルージに始まって、ジョンも、トロツティも、そしてレドローにも、このまっとうな精神は引き継がれている。『オリヴァー・トゥイスト』のブラウンロー氏、『骨董屋』のネル、『デイヴィッド・カパーフィールド』のアグネスなどの非の打ちどころのない善人は、天使であり「クリスマスの子」である。ネルに比べて、ミリーが陰影にかけ、個性が薄く、迫力に欠け、すなわち主要人物としてさほど魅力的でないのは、やはり短編と長編の格の違いであろうか。

クリスマス 5 作品では「クリスマス・キャロル」の評価がずば抜けているのは仕方ないが、ディケンズの自伝的要素との関係、自己の内面の見つめ方、作風の明確な転換などの観点から、ほかの 4 作品がもっと注目を浴びてよいと思われる。クリスマス作品は、後期も毎年のように『家庭の言葉』や『一年中』に掲載されたが、これ以降ふたたび量産されることになる **short stories** については、別の論文にて分析を続けたい。

注と参考文献

(1) 筆者の論文「ディケンズの初期「短編小説」」(清泉女学院短期大学研究紀要第 8・9 合併号、1990 年)、および「ディケンズの初期「短編小説」(2)」(同第 10 号、1992 年) 参考。なおこれらの論文で説明したように、ディケンズの短い文章や作品については、短編小説という誤解を招く呼び方ではなく、**story**、あるいは **short story(stories)** という呼び方をする。

(2) この論文で言及する著作について、長編作品とその英語タイトル、発表された雑誌の発行年、そしてディケンズが編集長を務めた雑誌とその英語タイトル、発行期間を年代順に挙げておく。

『ピックウィック・クラブ遺文録』 *The Posthumous Papers of the Pickwick Club* (1836-37)

『オリヴァー・トウィスト』 *Oliver Twist* (1837-39)

『ハンフリー親方の時計』 *Master Humphrey's Clock* (1840-41) 週刊誌

『骨董屋』 *The Old Curiosity Shop* (1840-41)

『マーティン・チャズルウィット』 *Martin Chuzzlewit* (1843-44)

『ドンビー父子』 *Dombey and Son* (1846-48)

『デイヴィッド・カパーフィールド』 *David Copperfield* (1849-50)

『家庭の言葉』 *Household Words* (1850-59) 週刊誌

『辛い時代』 *Hard Times* (1854)

『一年中』 *All the Year Round* (1859-70) 週刊誌

(3) この論文で言及するクリスマス作品の英語タイトルと出版年を年代順に挙げておく。

「クリスマス・キャロル」 'A Christmas Carol' (1843)

「鐘の精」 'The Chimes' (1844)

「炉辺のこおろぎ」 'A Cricket on the Hearth' (1845)

「人生の戦い」 'The Battle of Life' (1846)

「憑かれた男」 'The Haunted Man' (1848)

『クリスマスの本』 *Christmas Books* (1852) 以上5作品を一冊にまとめて出版。

(4) 筆者の論文「ディケンズ初期「短編小説」(2)」、pp.108-09 参照。

(5) Preliminary Note to *Household Words*, March 30, 1850。この節は拙訳。この論文中特に説明のない訳文は全て筆者による。

(6) *Christmas Book*, p.27; *David Copperfield*, p. 55.

ディケンズの作品からの引用は、いずれも The Illustrated Dickens Edition (London: Oxford Univ. Press, 1947~58) の各作品に拠る。

(7) Forster, John, *the Life of Charles Dickens: Volume I*, Everyman Edition (London: J. M. Dent and Sons, 1969), p. 301.

(8) chapbook の歴史については、小林章夫『チャップ・ブッカー近代イギリスの大衆文化』(駈々堂、1988) に詳しい。

(9) Davis, Earle, *The Flint and the Flame: Artistry of Charles Dickens* (Columbia: University of Missouri Press, 1963), p. 148-49.

(10) コーンウォール地方の民話 Jack the Giant-killer、フランスの民話 Beauty and Beast、Bluebeard、フランス生まれのロマンス Valentine and Orson (17世紀イギリスで人気を博した)、14世紀農民一揆(1381)の指導者 Watt Tyler、イギリスの民間伝承 Tom Thumb、フランスをはじめ各地に伝わる民間伝承 Cinderella、14世紀ロンドン市長 Richard Whittington(? ~1423)、16世紀人気劇の主人公 Friar Bacon、中世伝説 Wandering Jew。

(11) バーデット=クーツ(Angela Burdett-Coutts, 1814-1906)の進める貧民学校(ragged school)建設運動や売春婦更生施設の内容などについて、ディケンズは助言をしていた。

- (12) テッグ社の「子どものためのおとぎ話文庫」The Child's Fairy Library。テッグ社は Thomas Tegg (1776-1845) の経営する ロンドン市内 Cheapside の本屋、出版社。
- (13) Chesterton, G. K., *Appreciations and Criticism of the Works of Charles Dickens*. London: J. M. Dent and Sons, 1911, p. 103.
- (14) Humphry House, *The Dickens World*, 2nd ed. (Oxford University Press, 1942), p.52.
- (15) *Christmas Stories*, "What Christmas Is As We Grow Older," p.23.
- (16) 松村昌家『『クリスマス・キャロル』—幽霊とアスモディアス』『ディケンズの小説とその時代』研究社、1989。英訳本ではアスモディアスの名で通っている。
- (17) Stone, Harry, *Dickens and the Invisible World* (Basingstoke, England: the Macmillan Press, 1980), p.119.
- (18) Thomas, Deborah A., *Dickens and the Short Story* (Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press, 1982), p.40.
- (19) Slater, Michael, ed. *The Christmas Books, by Charles Dickens* (Harmondsworth, England: Penguin, 1971), Volume I, xvii.
- (20) *ibid.*
- (21) *ibid.*
- (22) この翻訳は、『ディケンズ鑑賞大辞典』（南雲堂、2007年）、pp.208-09。
- (23) Thomas, p.48.
- (24) Stone, p.132.
- (25) Forster, Volume I, pp. 19-33.